

作家と連携した鑑賞授業の取り組み：  
静岡大学教育学部附属島田中学校での事例研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加茂, 千景, 高橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008936">https://doi.org/10.14945/00008936</a>

## 作家と連携した鑑賞授業の取り組み —静岡大学教育学部附属島田中学校での事例研究—

加茂千景\* 高橋智子\*\*

### A Practical Report of Art Appreciation Education through Cooperation with Artists -A study in Fuzoku SHIMADA junior high school-

Chikage KAMO Tomoko TAKAHASHI

#### 【要旨】

近年、図画工作科及び美術科の授業づくりにおいて、作家や学芸員（美術館等）と連携した取り組みが盛んになり、様々な実践が報告されている。本報告は、学校と作家が連携した授業づくりの取り組みについて、先行研究等からそのスタイルの傾向を分析し、静岡大学附属島田中学校で実践された取り組みについて報告を行うものである。本実践では、作家との連携授業が単元計画の中に計画的に位置づけられており、それが特徴でもある。実践を報告すると共に、作家と連携した授業づくりの教育内容・方法の一事例を提案する。

【キーワード】 鑑賞教育 授業づくり 連携 作家 題材開発及び研究

#### 1. はじめに

近年、図画工作科及び美術科の授業づくりにおいて、作家や学芸員（美術館等）と連携した取り組みが盛んになり、様々な実践が報告されている。平成 20 年告示の中学校学習指導要領には「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」や「実物の美術作品を鑑賞する機会が得られるようにしたり、作家や学芸員と連携したりして、可能な限り多様な鑑賞体験の場を設定するようにする」<sup>1)</sup>との記述があり、学校と地域の文化施設、作家との連携による授業の充実が求められている。しかし、学校が美術館や作家等と連携を行うことには、多くの課題も山積している。平成 21 年に静岡県立美術館で開催された第 1 回鑑賞教育指導者研究会では、学校と美術館との連携について、金銭・システム面等のハード面や資料や教材等のソフト面の課題が参加者から幅広く出された。また、平成 23 年に報告された「特定の課題に関する調査（図画工作 美術）」<sup>2)</sup>の中では、「地域の美術館等と連携するような指導を工夫していますか」の質問に対し、肯定的な回答をした小学校教員は 11.8%に止まり、依然として全国的に低い数値を示していることが明らかである。近年、美術館等の活用や作家との連携が教育において重要なキーワードになっているにも関わらず、現場の教員や美術館関係者等は多くの不安や課題を抱えていることが上記のアンケートや調査等から考察できる。

#### 2. 作家と連携した授業づくりのスタイル

作家との連携による授業づくりに着目してみると、近年、様々なスタイルで実施されている。こうした実践で課題としてあげられるのが、作家とのコンタクトの取り方、ねらいや内容の設定、計画、方法、評価等である。特に、作家とのコンタクトに関して、教員が個人で取り組むことは容易なことではない。作家との連携による授業づくりのスタイルは、おおよそ、以下の 3 つに大別される。

- ・外部プログラムへの参加
- ・NPO 法人などによるコーディネート
- ・教員（個人）によるコーディネート

まず、外部プログラムについてだが、近年、美術館等で作家を学校に派遣する取り組みが積極的に実施されている。例えば、東京都現代美術館では、スクールプログラムの中で「アーティスト 1 日学校訪問」を設定しており、活躍中の現代美術アーティストを都内の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校（年 6 校）を訪問し出前授業を行っている<sup>3)</sup>。美術館以外にも、企業等の団体が実施している取り組みもある。朝日新聞社では、読書推進事業として「オーサー・ビジット」<sup>4)</sup>に取り組んでいる。「オーサー・ビジット」では、「作家が教室へ！なりたい自分へ一歩」をキーワードに掲げ、子どもが世界の多様さに驚き、表現の楽しさ等に触れる事をねらいとして、人気の作者（本に関係

\* 静岡大学 教育学部 附属島田中学校

\*\* 静岡大学 教育学部

する)が学校を訪問し、特別授業を行っている。対象は、小学校から高校であり、学校と相談の上、実施時期などを決定している。

次に、NPO 法人等によるコーディネイトだが、学校と作家の連携の際、NPO 法人が中心となり学校に作家を派遣する事例が多く報告されている。NPO 法人「芸術家と子どもたち」は、1999 年に発足し、2001 年から NPO 法人として活動を行っている団体である。「ASIAS (エイジラス)」という活動では、現代アーティスト (美術、ダンス、音楽、演劇等の多様なジャンル) が小学校・中学校、幼稚園等に出かけていって、教員と協力しながらワークショップ型の授業を実施している<sup>5)</sup>。さらに、横浜市では横浜で活動を続ける NPO や芸術団体、地域の文化施設を中心に、学校、アーティスト、企業、地域住民、行政等が連携・協同する場「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」を平成 20 年に設立している。学校プログラムは、平成 16 年からスタートしており、芸術に触れる機会を提供することや創造性の育成等をねらいとして、美術、音楽、演劇等、幅広い分野で活躍している芸術家が直接学校へ出かけ、「体験型」と「鑑賞型」のプログラムを提供している<sup>6)</sup>。この 10 年間で、7 万人を超える児童・生徒が参加している<sup>7)</sup>。

実際、近年、こうした外部プログラムや NPO 等による地域の人材バンクを活用して、各学校が授業に取り組んでいることが指摘されており<sup>8)</sup>、図画工作科や美術科だけでなく、言語教育や音楽科等においても、事例が報告されている (城間・茂呂, 2007; 岡田・楨原, 2014)。

最後に、教員 (個人) 自身によるコーディネイトである。これは、教員が直接作家と連絡を取り、連携を行う方法である。

学校では、以上述べてきた方法 (スタイル) を選択しつつ、作家と連携した授業づくりに取り組んでいる。特に、外部プログラムや NPO 法人等によるコーディネイトについては、利用している学校が多く存在し、その報告数も多い<sup>9)</sup>。しかし、これらは地域によって偏りがある事も確かである。東海地区では、愛知県で開催された「あいちトリエンナーレ 2013」において、参加アーティストを学校へ派遣する取り組みが行われていたり、愛知県立美術館を中心とする「愛知県鑑賞学習普及事業実行委員会」では、平成 23 年度から文化庁の助成を受けて、地域の学校や美術館・アーティスト等と連携して事業を実施したりしている。静岡県では、こうした取り組みが充実しているとはいえ、学校が作家と連携した授業づくりを提案する際は、教員自身の努力によって、作家とコンタクトを取り、授業づくりに取り組んでいかなければならない状況にある。

静岡大学附属島田中学校では、近年、全教科を通し

て、連携を意識した授業づくりに取り組んでいる。美術科においても、「地域 (人・こと)」との連携、「他教科・他教員」との連携、「他機関 (美術館等)」との連携に取り組んできた<sup>10)</sup>。前任者 (美術科) が担当した授業では、単元内に地域の作家と連携した授業を位置付けて実施したこともある。平成 25 年度の年間指導計画にも、授業者 (加茂) のコーディネイトにより、作家と連携した授業づくりに取り組んでいる。

### 3. 先行研究

作家と連携を行った実践については、地域の NPO が中心となり作家と学校をつないだ事例や大学・学校・アーティストの連携事例、地域の芸術祭のプロジェクトの 1 つとして実践された事例等が報告されている。

NPO が作家をコーディネイトした実践報告に、津屋有李「滋賀県における NPO がつなぐ美術館・芸術家との学校連携」<sup>11)</sup>がある。平成 12 年に発足した NPO が学校と美術館及び芸術家の橋渡し役となり実施した連携授業から、連携授業で重要なことは学校が主体となり、学習の場であることを共通理解することだと指摘する。また、鳥取大学の「地域再生プロジェクト」活動報告 (2013 年度) では、鳥取県内東中西部の小中学校と連携し、アーティストを招いたワークショップ型授業実践を通して学ぶ機会を設けている。特色としては、地域の NPO 等と大学教員が連携し、学校でのワークショップ事業をコーディネイト・実施する等があげられている。課題には、時間的なものから予算的なものまで、ハード面の充実 (アーティストの登録、リスト化、情報公開などシステム構築等) に関する課題が多くあげられている。本報告では、鳥取大学附属中学校での現代美術作家によるワークショップ「ふつう (日常) の門」も紹介されている。3 日間にわたりオーギュスト・ロダン作「地獄の門」と同じサイズで「日常の門」を制作する内容が紹介されている。

大学・学校・アーティストの連携事例としては、辻泰秀 山本政幸 浅尾知子「地域における『学校美術館』の構想と準備—地域の学校やアーティストとの連携—」<sup>12)</sup>がある。本実践では、大学教員のコーディネイトによりアーティストが学校に来校し、本物の作品を展示する取り組みが行われている。教育活動に深い理解をもち、ギャラリー・トーク等への協力できるアーティストを選出している。連携による実践では、事前に丁寧な準備や打ち合わせをすることが望まれる事、児童・生徒の実態把握の重要性等が指摘されている。

地域の芸術祭のプロジェクトとして実施された連携事例としては、佐藤哲夫 磯辺征尊「芸術家と教員のコラボレーション授業によって生まれる子どもの芸術的気づき—『水と土の芸術祭 2012』こどもプロジェクトの事例—」<sup>13)</sup>がある。芸術祭の参加芸術家と教員のコラボレーションによる授業実践が紹介されてお

り、実践を通して、子どもの芸術的気づきを芸術家が触発していることを指摘している。

以上、先行研究から、作家と連携した授業には様々なスタイルがあり、成果や課題も多様な視点からあげられていることがわかる。実践としては、ワークショップ型の単発的な報告が多くみられる。作家と連携した単発的な実践が教育効果を期待できないというわけではないが、こうした実践が教科の年間指導計画や単元の中に意図的・系統的に位置づけられるとしたら、その教育効果はより期待できると考えられる。先行研究の中には、参加作家の選出条件として同学校で次年度以降の参加も期待できることがあげられているものもある<sup>14)</sup>。

本稿では、単発的な授業計画ではなく、年間指導計画及び単元計画の中に計画的に位置づけられた附属島田中学校での実践を報告すると共に、作家と連携した授業づくりの教育内容・方法の一事例を提案する。

#### 4. 附属島田中学校美術科の研究概要

##### (1) 問題の所在

図画工作科・美術科という教科の魅力の一つに、「どの子も楽しめる」という点があげられる。しかし、中学校の美術科で実感させたいのは、ただ「やってみよう」と興味をもって活動する楽しさだけではない。授業を通して、生徒が自己の内面に目を向け、自分の想いや自分らしさを追究し、その上で「自分で新しいものを創り出す楽しさ」を実感させたいと考えている。美術の授業は、美と創造という観点で、創造することの楽しさや喜びを実感し充実感や達成感を味わう学習であり、生徒たちに新しく何かを創り出すことへの意欲をもたせる心の教育である。そして、美術の授業を通してつけた力は、生徒が生涯にわたって豊かに生きていくための、自分で楽しさを創造していく力につながっていくと考える。

しかし、実際に中学生と関わっていくと、題材に対して「やってみよう」という意欲がわからないという実態に驚かされる。他者との技能面だけを比較し、表現や鑑賞をすること自体を投げ出してしまふ生徒も多い。これには、自己肯定感の低さが大きな影響を与えていると考えられる。その要因は、大きく2つあると考えた。

1つ目は、発達段階である。思春期と呼ばれる中学生の時期は、心も体も、人生の中で最も大きく変化し成長する。自他の表現や作品も、客観的に見ることができるようになるため、自己と他者の違いや、能力差を感じるが多くなる。他者よりも下手だと思うと、周りの目が気になり、「楽しくない」「どうせ上手くできないからやりたくない」「自分の作品を見せたくない」と思う傾向にある。

2つ目は、家庭環境である。どんなに辛いことが

あっても、ありのままの自分を受け止めてくれる温かな家庭があれば、子どもは乗り越えていくことができる。ところが現実には、虐待やネグレクト、家庭内の不和、離婚や再婚、親の失業等、子どもを取り巻く環境は著しく悪化している。このような環境の中、目の前の多くの子は、親に反抗するでもなく文句を言うわけでもなく、驚くほど大人の事情や想いを理解し、自分の気持ちを押し込めて生活している。そのため「どうせ自分なんか」と自暴自棄になったり、自己肯定感をもてなかつたりする子どもが増えていると感じている。

また、附属島田中学校（以下、本校と記す）ならではの事態もある。本校の生徒は、入学に当たって受験を経験している。地域の中でも比較的学力の高い生徒が集まっており、家庭的にも教育熱心で経済力もあり、恵まれている生徒が多い。集団としても素直で明るい雰囲気があり、学習意欲も高い。美術においても、表現や鑑賞を投げ出してしまふということはない。作品も必ず完成させ、質が高いものが多い。一見すると、自己肯定感が低くなる原因はないように思われる。しかし、本校にも家庭的な問題を抱えている生徒はもちろんいる。また、親からの過度の期待をプレッシャーに感じたり、過保護・過干渉にストレスを感じたりしている生徒も多い。さらに、多くの生徒が、週に2・3回は学校帰りに塾に通い、夕食もコンビニで買って済ませるのも実情である。塾には附属生だけのクラスが設けられ、模試の順位で座席が決められており、無意識に上下関係ができていく。

学校では、同質の集団であるためか、「できて当たり前」という気持ちが強く、自分の理想とする姿や達成目標が非常に高い傾向がある。言うなれば「力のある転校生の集団」である。だからこそ、できなかった時の劣等感は、相当なものなのである。実際には90%もできているのに、ほとんど全員が100%できているように感じて、「自分だけ90%しかできなかった」「自分はできなかった」と思い込んでしまう。このことが、どんなにがんばっていても成就感や達成感をもてず、本校の生徒の自己肯定感を低下させる原因となっている。

美術においてもこの傾向は強く、この「できて当たり前」の気持ちが、表現や鑑賞の妨げになっている。周りや技術の優劣のみで比較するため、実際には、すばらしい表現や鑑賞をしているにもかかわらず、自分の表現や感じ方に自信をもてないのである。

表現すること、鑑賞することの価値は、知識や技能の優劣をはかることではない。この生徒たちが、主体に創造する楽しさを実感するためには、「対話」を通して他者の想いを知り、自分の想いをより確かにすることで、形や色彩などのさまざまな造形要素から作者の想いを感じ取り、新しい価値を見いだす力をつける

必要あるのではないかと考えた。

## (2) 研究目的

上述した事項や生徒の実態をもとに、平成 23 年度より附属島田中学校美術科（以下、美術科を記す）の研究主題（テーマ）を「創造する楽しさを実感し豊かに生きる生徒の育成～他者との対話を通して自己肯定感を高める授業の工夫～」と設定し、研究及び実践を重ねている。教科で育てたい生徒像は、「美術を愛好し、豊かに生きるための創造活動への意欲にあふれ、自ら「美しさ」や「楽しさ」を創り出せる生徒」と設定した。

教科テーマは、教科で身につけたい要素の中の「関心・意欲・態度」に着目をし、「創造する楽しさを実感し豊かに生きる生徒の育成」と設定した。また、サブテーマは「他者との対話を通して自己肯定感を高める授業の工夫」とした。対話とは、「向き合うこと・語り合うことで心の共鳴を引き起こし、新たな価値観を生み出していく活動」であると考えた。「ひととの対話」は、大きく分ければ、自分自身との対話（自己内対話）と、自己と他者との間の対話（他者間対話）とに分けられる。表現と鑑賞の中で、「自己内対話」と「他者間対話」を繰り返してつないでいき、自己肯定感を高めることで、創造する楽しさを実感させていきたい。対話は「ひと」だけに限ったものではない。「こと」、「もの」との対話もある。どの対話においても、最終的に全てが「自分自身との対話」であると言えよう。本題材では、他者の作品の出来映えや他者の目を気にして、自己肯定感を持ってない本校の生徒達の実態を踏まえ、対話を生み出す題材づくりや方法、プロセスなどを工夫し、授業過程における意図的・効果的な「他者との対話」のあり方を検証している。図1は、美術科の研究構想図である。

## 5. 作家と連携した授業実践

### (1) 題材名

命の輝きを切りだそう ～私の沖縄体験を通して～

### (2) 対象学年

第3学年（男子61名 女子59名 計120名）

### (3) 題材目標

- ・沖縄の歴史や事実、自己の体験から発信したい思いを明確に持ち、自分が感じる「命の輝き」とは何かを考えて意欲的に表現する。（関心・意欲・態度）
- ・沖縄の歴史や事実、自己の体験を土台とし、自分が感じる「命の輝き」を、色彩や形などの造形要素を意識し、抽象と具象を効果的に組み合わせ工夫する。（発想の能力）

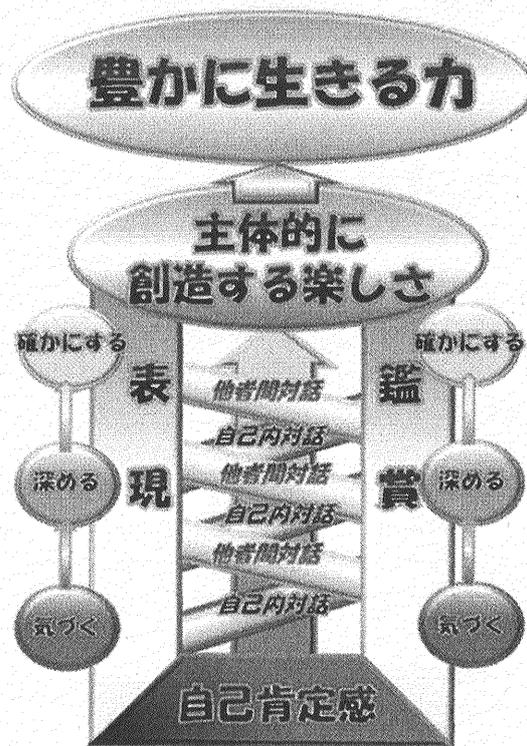


図1 本校美術科の研究構想図

- ・試作での経験を生かして、自分が感じる「命の輝き」を切り絵で表すために、自分の意図に合う切り方を模索し、創造的に表現する。（創造的な技能）
- ・自他の作品に込められた思いと「命の輝き」を、色彩や形などの造形要素に着目して感じ取り、自分の美的価値観をもって自他の作品のよさを味わう。（鑑賞の能力）

### (4) 題材設定の理由

本題材は、3年生の題材の最終授業（切り絵）として、また中学校3年間の最後の題材として計画したものである。切り絵の題材「命の輝きを切り出そう～私の沖縄体験を通して～」（全18時間・4～11月及び3月実施）は、修学旅行での平和学習をもとした切り絵の制作を通して、自分が感じたこと・考えたことを再構成し、作品を通じて自己の想いを発信していくことをねらいとしている。なぜ切り絵を題材として選んだのか。それには、本校の修学旅行及び福井利佐氏との出会いについて特筆しなくてはならない。

本校の修学旅行は、県内の中学校ではめずらしく、沖縄での平和学習を主たる目的としている。今回は、その修学旅行でおこなった平和学習をいかして題材を組むことにした。生徒が作品を制作する上で、最も大切なことの一つは、テーマ設定である。こちらから与えたテーマではなく、自分が表現したいと思える切実感のあるテーマを設定することは、その後の制作意欲

に大きな影響を与える。自らテーマを探す場面から、すでに生徒の自己内対話が始まっている。体験を通して得た強い思いがあるならば、なお一層自分の内なる思いを他者に発信したいという思いが強まり、テーマに「表現したい必然性」が生まれてく。修学旅行によって生まれた平和への強い思いにより、生徒の心は大きく揺さぶられ、自然と涙が流れるほどの感動や重い感情を生み出した。そして、生徒達はその思いを「発信したい」と考えた。そこで、この体験や感じている思いを、美術の力を生かして形に残すと共に発信することで、生徒の自己肯定感が高まっていくのではないかと考えた。しかし、こうしたねらいを達成する題材検討を行っていたが、なかなか決定することが難しかった。迷いつつも、題材検討を続ける中、鑑賞の題材のヒントを探すために、静岡県立美術館を訪れた際、偶然にも福井利佐氏<sup>15)</sup>の画集と作家本人に出会った。福井氏の生命力溢れる作品と、地元である静岡出身の作家本人と、子ども達の修学旅行で体験し感じる思いや沖縄の光と影が、一本の線でつながったように感じた。修学旅行で生まれるであろう、彼らの心の中の「沖縄の光と影」、「自分自身の命の輝き」を表現するためには、白と黒のコントラストが際立つモノクロに絞った切り絵が、最も適していると確信し、題材として年間指導計画の中に位置づけ、取り組むこととした。

#### (5) 作家との連携スタイル

本実践の作家との連携に関しては、教員自身（個人）によるコーディネートである。先述したように、静岡県には、外部プログラムやNPOでの取り組みが充実しているとはいえ、作家と連携した授業づくりについては、授業者本人の努力によるところが大きい。静岡県立美術館で福井氏の作品（画集）と本人に直接対面した授業者が、その場で名刺を交換して、後日授業依頼の問い合わせをメールで行った。外部プログラムやNPOによる授業においても、事前打ち合わせは重視されているが、本実践においても重視した。メールでのやり取りの他に電話での打ち合わせを複数回行い、対面による打ち合わせも行った<sup>16)</sup>。事前打ち合わせでは、授業当日に作品を持参してもらうことを依頼した。また、授業のねらいや単元計画や内容等を福井氏に理解してもらうために、本校の研究発表会の紀要を郵送した。福井氏は、内容に目を通してくれると共に、単元のねらい等に強く共感してくれた。

#### (6) 題材研究

福井氏の作品は、圧倒的な生命力に溢れている。黒い髪の毛のよううごめく線は、時に見るものに恐怖すら感じさせる。私達の既成概念の中の切り絵とは、

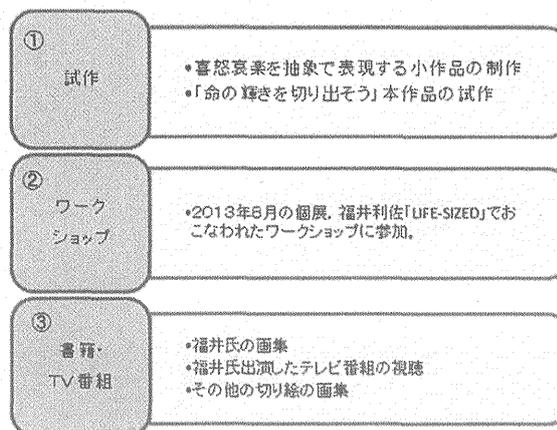


図2 切り絵及び福井氏に関する題材研究の流れ



図3 授業者による参考作品

明らかに違う。授業者に切り絵の経験がほとんど無かったため、実感をもって作品について語ったり指導したりするには、題材研究が必要であった。そこで、切り絵の魅力・福井氏の作品の魅力について、図2のように題材研究を進めた。

①では、実際に授業者が引率した修学旅行の体験からテーマを決定し、参考作品づくり（試作）に取り組んだ。1枚だけではなく、複数枚制作することで、体験からイメージを広げ、思いを深めつつ表現するという一連の流れを確認すると共に、材料・用具研究や画用紙を切るという技術に関するポイントもおさえることができた。図3は、最終的に生徒達に提示した授業者による参考作品である。

②では、福井氏との打ち合わせを兼ねて、ポーラ

ミュージアムアネックス（東京都中央区銀座）で開催されていた福井氏の個展及びワークショップに本校の協力員である公立学校の教員3名と共に参加してきた（図4）。ワークショップでは福井氏が講師を務め、切り絵の作品を制作する内容（3時間）であった。制作する型紙は決められていたものの、作家本人の指導のもと、切り絵の方法やポイント、魅力を感じることができ、充実した時間となった。作品展示等についても学びを得ることができた。

③では、福井氏や他の作家の画集を収集し、福井氏が出演したTV番組や映像作品のDVDを視聴し作家及び作品研究を深めた<sup>17)</sup>。



図4 ワークショップで制作する様子

### (7) 単元計画

本実践の単元計画は、表1の通りである。本単元は、全18時間で構成されており、7月末から11月にかけて実施した題材である。本計画（表1）は、計画段階で作成したものとなっている。計画段階では、生徒が切り絵（表現）の作品を完成した後、福井氏を授業に招き、鑑賞授業を実施するという流れを設定した。実際の授業の流れは、表1の通り変化はなかったが、本単元の最終授業となる18時間目の福井氏参加の鑑賞授業は、作家とのスケジュールの調整などの理由から3月に新たに2時間設定して実施することになった。また、事前学習の一環として、静岡大学教育学部の学生が作成した福井氏に関するパネルを本校内に展示し、生徒の鑑賞への意識や関心を高めていった。

### (8) 作家と連携した鑑賞授業の概要と目標

- ・題材名  
「表現すること～出会い 見つけて 感じ取ろう～」  
(全2時間 3月実施)
- ・対象学年  
第3学年（男子61名 女子59名 計120名）
- ・目標
- ・表現者の生の声、本物の作品に直接触れる活動を通して、3年間の美術の学習を振り返り、自分にとっての美術、思いを表現することの価値・意義について考える。（美術への関心・意欲・態度）
- ・作品の鑑賞や作者との対話を通して、色や形などの造形要素に着目し、作品のよさを味わい、作者の思いや表現の意図を感じ取る。（鑑賞の能力）

表1 単元計画（全18時間）

第1時	【鑑賞】二人の恋人 ピカソの二人の恋人の肖像画を対比鑑賞し、造形要素から人物像を想像する。
第2時	【鑑賞】ピカソはなぜ 色彩豊かに描くピカソが、ゲルニカを白と黒だけで描いたその思いを考える。
第3時	【表現】カッターの達人になろう① 紋切りに挑戦！ 紋切りをもとに、ワークシートでためしに切り、美しく切れる方法を考える。
第4～ 6時	【表現】カッターの達人になろう② 喜怒哀楽を抽象で表現しよう 喜怒哀楽を表す二回繰り返す擬態語を選び、抽象表現した小作品を制作する。
第7 ～ 16時	【表現】命の輝きを切り出そう ⑦ 小作品の鑑賞をもとに、本題材への意欲を高める。（他者との対話①） ⑧ 小集団でワークシート①の自分の思いを語り合い、テーマを決定する。 ⑨・⑩ 構成に必要な資料を考え、探し、それをもとに下絵を描く。 ⑪小集団で互いの下絵を見合い、質問・応答しあう。（他者との対話②） ⑫～⑯制作
第17時 (本 時)	【鑑賞】40人の命の輝きを感じ取ろう！ 完成作品の相互鑑賞から、自他の作品に込められた思いと40人の「命の輝き」を色や形などの造形要素に着目して感じ取り、自分の価値観をもって自他の作品のよさを味わう。 (他者との対話③)
第18時	【鑑賞】命の輝きを感じ取ろう 静岡県出身の切り画家・福井利佐さんの作品を鑑賞する。

本題材は、作家（表現者）の生の声を聞き、本物の作品に直接触れる活動を通して、三年間の美術の学習を振り返り、自分にとっての美術、思いを表現することの価値・意義について考えることをねらいとして実施した。

①第1時

第1時は、滝平二郎氏と福井利佐氏の作品を対比し鑑賞をさせた。鑑賞作品には、滝平氏の「モチモチの木」の表紙絵、福井氏の「個人的識別 母」を使用した。まずは、二つの作品の類似点と相違点を語り合った。実際に切り絵を制作した生徒だからこそ、黒い線が無数に重なる福井氏の作品から、「血管のように血が通っているようだ」「生きているみたい」等、作品から生命力や命の輝きを感じとっていた。また、滝平氏の作品からも、線の太さによる立体感や単純化のよさを感じとることができた。

次に、「福井さんは切り絵で何を表現したかったのか」という問いを投げかけた。この問いに対しても、「筋肉の動きや立体感」という物質的な面からの意見だけでなく、「表面的には見えない思い」や「生きている、血ががよっている感じ」といった作者の想いや内面について想像を広げた意見も多く出た。福井氏が静岡県出身の切り絵作家であることや、様々な業界とコラボレーションをして表現活動を展開していること、家が理髪店だったこと等、生徒の発言と結びつけながら情報も与えていった。同時に、滝平氏についても、終戦を沖縄本土で迎えたことや、他の代表作にも触れ、それぞれの表現の素晴らしさや作品の魅力について、生徒の言葉を生かしつつまとめていった。

最後に、次の時間の予告を行った。三年間の最後の美術の授業として福井氏を招くことを告げ、福井氏への質問を一人1つ記入させた。

第2時は、三年間の最後の授業として、全クラス合同で、実施した。本授業に、静岡県出身の切り絵作家である福井利佐氏をお招きした(図5)。生徒から出た質問事項を集計し、その質問事項をもとに、授業者と作家の対談形式で進めていくこととした。生徒からの質問事項は、数の多い質問と本質に迫る質問に分けた。以下が主な質問内容である。

【多かった質問】

- 一作品に、平均どのくらいの時間がかかるのか。
- モチーフは、どうやって決めているか。
- 普段、目には見えない線が顔にたくさんあるが、その線はどんなふうにも生まれてくるのか。
- 切り絵に使われている色とその配置は、どのように選び、決めているのか。
- 切っているときはどんな気持ちか。
- 何を考えて切っているか。
- 切り絵を通して何を伝えたいと思っているのか。
- 何か伝えたいメッセージはあるのか。

【本質に迫る質問】

- 描く絵と切る絵と、何がどう違うか。
- 作品をつくっている途中で、これは違うな、これじゃイヤだなと思うことはあるのか。また、その時どうするか。
- いつから美術の道を目指したのか。
- 美術をやっている、将来何かの役に立つのか。
- 「目に見えるもの」と「目に見えない 感じるもの」の2つのうち、どちらの方を特に重視しているか。
- 福井さんにとって「命」「生命力」とは何か

②第2時

導入では、福井氏の紹介をおこなった。経歴について、テレビ番組「オデッサの階段」<sup>18)</sup>を一部抜粋し視聴させ、授業者が補足説明を行った。その後、福井氏から、直接自己紹介をしていただいた。

その後、事前に集計した質問から、数が多かった質問を福井氏に投げかけていった。対談の中では、途中、本物の作品を鑑賞する時間を取った。本授業のために、福井氏には2点の作品を持参いただいた。実際に作品を間近に鑑賞することで、生徒達の興味・関心が高まり、その後の福井氏に対する感想・質問タイムでは、事前の質問以外にも、「福井さんは生と死をどう考えているか。」等、作品の本質に迫る質問が生徒からでた。福井氏の返答の中には、「自分には切り絵しかなかった」「言葉では言い表せない何かを表す」「美術は心を浄化する」「表現に込めた想いは必ず伝わる」「美術は人生を豊かにする」「表現ができるのは人間だけ」等、作家の生き方に触れる言葉、美術の大切さや魅力を語る言葉が数多くあった。生徒達は、実際に作者の表現に対する真摯な姿勢や本物の作品に触れ、互いの想いを受信・発信をすることで、表現することや鑑賞することの意義を深く考えることができた。

授業の最後には、三年間をふり振り返り、「自分にとっての美術とは何か」を考える自己内対話をおこなった。作家との直接的な他者間対話が生徒の心を揺り動かし、より深く、美術と自分の生き方について考える姿が見られた。以下は、生徒の記述（一クラス40人分）に多かった内容と、記述の一部抜粋である。

◇「あなたにとって美術とは」記述内容（40人分）

自分自身を表現できる（自己表現）	28人
これからも表現・鑑賞し続けたい	25人
美術のよさ・楽しさ・おもしろさ	22人
「自分らしさ」「個性」の大切さ	21人
他者理解としての美術（伝える・伝わる）	20人
自分の成長・美術に対する気持ちの変化	18人
美術の存在意義（社会・自分にとって）	15人
美術の可能性（～できるのではないかな）	9人
これからの自分の生き方	5人
美術の難しさ	5人
福井氏の作品の造形要素から感じたこと	5人

## ◇あなたにとって美術とは（一部抜粋）

福井さんの、人生を美術とともにつくるような考えが、自分の中ですごく共感できた。自分も美術で自分を表現して…とはいかないけれど、福井さんにとって切り絵のようなものを、これから自分の人生の中で見つけていきたい。まだ、自分の将来やりたいことすら決まっていなくても、もしかしたら美術って、こんな時に見たり表現したりして、自分の心を満たしてくれるものなのかな。（H. Y）

私はこの2年間、見える美しさ＝うまさよりも、見えない美しさを意識していた。そういった面から考えると、美術って深いなと思う。自分を表現するため。自分を伝えるため。自分を見せるため。考えさせるため…。中学に入って、美術とか芸術に対する考え方が変わった。これから、もっと自分を表現しよう。授業で感じたこと、学んだことを活かして、新たな手段で美しさを出していきたい！（I. K）

今日、福井さんのお話を伺ったことで、美術は、人のつくった作品は、視野を広げ、生活を豊かにする力があるとわかりました。今まで何気なく受けてきた授業の中には、そのような奥の深い意味が含まれていたと気づかされ、「美術ってすごいな」と思いました。私は、美術はとても好きですが、みんなの上手な作品を見て、自分のものと比べてみると、いつも自分の作品がみんなより劣っていると感じてしまっていました。でも、「自分の気持ちを素直に描いたり、一生懸命に描けば、必ずその気持ちが伝わる。」という福井さんの言葉にとても感動し、勇気づけられました。だから、たとえ自分が得意ではないことでも、一生懸命取り組んでいきたいと思いました。自分なりの表現の仕方、自分の気持ちを伝えたいと思いました。（H. N）

## 6. 成果と課題

鑑賞の授業は、今までも繰り返し行ってきた。それは、ゴッホやピカソのように、すでにこの世にはいない画家達の作品であった。静岡県出身という点では、石田徹也氏の作品を鑑賞したこともあるが、やはり同様に、2001年に亡くなっている。生徒達にとって今まで実施した鑑賞授業は作品のみを鑑賞して、造形要素から作者の想いを感じ取るというものであった。

しかし、本実践では、作品だけではなく表現者である作家本人の想いを直接聞くことができる貴重な時間を設定した。また、生徒達は鑑賞前に、自身の想いを込めて切り絵作品を制作しているため（図6）、より興味・関心を持って、作家の話聞くことができた。そのため、作家への質問内容は技術面というよりは、なぜ切り絵なのか、どんな想いで切っているのか、どんなことを伝えたいのかなど、自分の制作と重ねた発言が多かった。作品鑑賞時には、作品に近づき、食い入るように鑑賞する姿に、生徒の想いの強さが感じられた。

印象的だったのは、福井氏が、中学生を決して子ど



図5-1 生徒の前で作品について語る福井氏



図5-2 福井氏の作品を間近で鑑賞する生徒の様子



図5-3 福井氏に質問する生徒

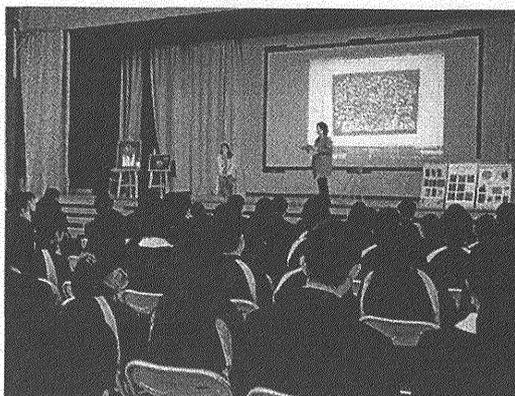


図5-4 授業者（右）と福井氏（左）の対談風景

も扱いせず、どんな質問にも、一人の人間として誠実に応えてくれたことである。全身全霊で命の輝きを表現している福井氏の心からの言葉が、子どもたちの心と共鳴していくのが伝わってきた。作品と作者、そのどちらもが同時に輝き、目の前でダイレクトに想いを伝えてくれる。また、作家が自分達の言葉に耳を傾け、応えてくれる。その濃密な他者間対話の時間が、生徒達の美術への意識をより高めたのは間違いない。本実践の最後には、授業のまとめとして「あなたにとって美術とは」の問いを生徒に投げかけた。生徒達は、福井氏の作品鑑賞や対談での言葉と三年間の自分の美術における学びをつなげて言及しており、表現活動及び鑑賞活動に、高い意義や価値を見いだすことができていた。これこそが、最大の成果であったと感じている。

しかし、作家と連携する授業の実施は、決して簡単なことではない。課題としては、時間的問題・スケジュール調整の難しさがあげられる。本実践では、3年生の学年運営の時間を活用したため、時間の融通が利いたが、通常授業では、作家のスケジュールに合わせて時間を組むことは、他の授業や活動との兼ね合いもあり、思うようにはいかないだろう。

また、作家と連携しさえすれば成果があるというわけではない。今回は、単元計画の中に意図的に作家との連携による鑑賞授業を組み込んだ。事前の丁寧な打ち合わせを通して、作家にも鑑賞のねらいだけでなく、表現（切り絵制作）のねらいや内容等も理解いただいたため、生徒達の表現活動と本実践（鑑賞）が、一本の線で結ばれたのだと考える。作家と生徒の互いの想いが伝わりあい、高まったのだと考える。福井氏には、事前の打ち合わせやメールのやりとりで、生徒の制作活動の様子（過程）、作品に込めた想い、義務教育を終える生徒達にとって、本実践が最後の美術の授業であること、「美術が何の役に立つのか」と考えている生徒もいること等、お伝えした。そのことを踏まえて、「福井さんにとっての美術」について語ってほしいと依頼していた。綿密な打ち合わせの中で、授業計画や授業のねらい、生徒の実態等を共通理解しておくことが、連携授業においては必要不可欠であるといえる。また、作家との連携による授業については、学校の授業計画及び内容と切り離された単発的なものではなく、学校の年間指導計画や単元計画の中に意図的に組み込み、その教育効果を高めていく必要があるだろう。

## 7. おわりに

実践後、福井氏の公式ブログに本授業に関して、写真と共に作家の感想が掲載された（図7）<sup>19)</sup>。この言葉から、福井氏が授業者の題材への思いや単元を通して生徒につけたい力などを理解し共感してくれていることがわかる。また、作家が参加した鑑賞授業のみ

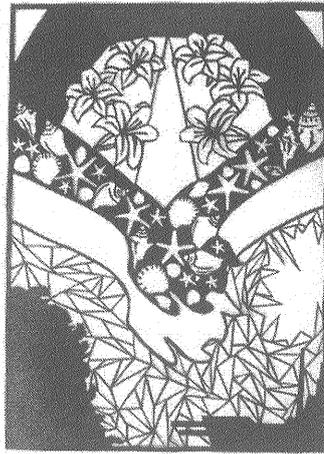


図6-1 生徒作品「未来へ続く」21.0×29.7cm

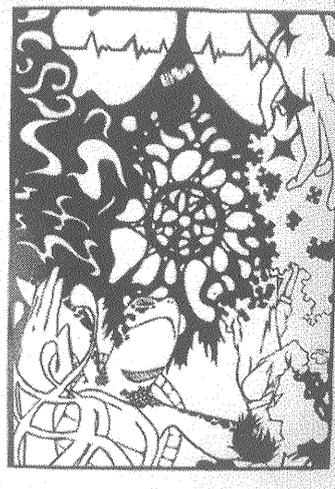


図6-2 生徒作品「歯車」21.0×29.7cm

先生は4月からの中学3年生の美術の授業を1年を通して「命の輝き」をテーマに、切り絵の手法を取り入れて下さいました。（中略）2年生最後の修学旅行に訪れた沖縄のひめゆりの塔で学んだ事もふまえ、3年生での授業に、戦争や命、平和などについて考えて作品制作を行ったそうです。夏には、私のワークショップに先生方が実際に参加して下さい、切り絵について学んで下さいました。そして、1年間取り組んだ美術の授業の最後に締め実際に作家を呼び、本物の作品も見て、話を聞くという一貫した素晴らしい取り組みをされたのです。（中略）美術はこれで最後になる子達もいます。そういった新しい門出をむかえた生徒さん達に美術の大切さを伝えてほしいとの事で、ご依頼いただきました。やはり、中には「美術って必要なの？」と思う子もいるようなのですが、先生は人間形成において美術はとても必要な物と捉えていて、それを最後に伝えたいという強いお気持ちと情熱がありました。（中略）高校になって美術にふれあう機会が無くなっても、ここまで美術をやってきたことは、確実にその子の糧となっているはずです。私の中学時代は美術の授業に救われていたと言えるくらい、自分にとって重要な時間でした。自分自身と向き合う事のできる大切な時間です。

図7 福井氏の連携授業の感想

ならず、これまで取り組んできた表現（切り絵制作）のねらいや内容を踏まえ、授業に臨んでいたのが伝わってくる。

作家が学校を訪問して、直接生徒達と表現したり鑑賞したりする授業は、それだけで魅力的である。ただ、すでに先述しているが、作家と連携しさえすれば教育的な効果があがるというわけではない。事前の打ち合わせ等を通して、授業者や作家が生徒への思いや願いを共有し、系統的な計画を持って実践に取り組むことが必要となるだろう。

本稿では、年間指導計画及び単元計画の中に計画的に位置づけられた附属島田中学校での実践を紹介すると共に、作家と連携した授業づくりの教育内容・方法の一事例を提案してきた。実践後、同作家と連携して大学でも同じように授業を実施している。大学での実践報告については、別の機会に行うこととする。

#### 謝辞

ご協力をいただいた切り絵作家の福井利佐さん、マネージャーの増賀雅美さんに心よりお礼申し上げます。

#### 註

- 1) 文部科学省「中学校学習指導要領解説 美術編」日本文教出版、2008、p. 80
- 2) 国立教育政策研究所教育課程研究センター「特定の課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果」平成23年3月
- 3) 東京都現代美術館 HP  
<http://www/mot-art-museum.jp/edu/school/artist.htm>  
(平成26年12月26日アクセス)  
本プログラムは応募制となっており、アーティストの講師料、交通費は美術館側で準備をし、授業で使用する材料や道具は各学校で準備することになっている。
- 4) 朝日新聞「オーサー・ビジット2014」HP  
<http://www.asahi.com/shimbun/dokusho/authorvisit/>  
(平成26年12月26日アクセス)  
平成26年度の募集は既に終了している（平成26年12月26日現在）が、絵本作家や写真家、宇宙飛行士など18名が講師一覧であげられている。
- 5) 芸術家と子どもたち HP  
<http://www/children-art.net>  
(平成26年12月26日アクセス)
- 6) ASIAS では、教員の希望をもとに、学校の状況や実態に応じて、教員、アーティスト、スタッフ（コーディネーター）が話し合い、意思疎通を図りながら、ワークショップ型授業を組み立てていく。教員から直接依頼（メールやFAX）する場合や教育委員会や自治体等を介して依頼する場合がある。原則として、首都圏の公立小学校を対象としており、学校側に財政的な負担はない。

- 7) 横浜市芸術文化教育プラットフォーム 学校プログラム事例集  
<http://y-platform.org/data/2014jireishu.pdf>  
(平成26年12月26日アクセス)
- 8) 岡田和也 榎原淳幹「詩の創作とワークショップ～言語芸術、書くこと、そして『峠には人の思いが懸かる』～」岡山大学大学院教育学研究科研究集録 第157号、2014、p. 1-19
- 9) 東京都現代美術館をはじめ、茨城県近代美術館、鳥取県立美術館、「芸術家と子どもたち」等の報告が多数ある。
- 10) 道越洋美 高橋智子「大学や地域との連携を通じた授業実践の取り組み—附属島田中学校美術科における教材研究の工夫—」静岡大学教育学部附属教育実践センター紀要、No. 21、2013、p. 187-200
- 11) 津屋有李「滋賀県におけるNPOがつなぐ美術館・芸術家と学校の連携」美術教育学 美術科教育学会誌 (30)、2009、pp. 241-252
- 12) 辻泰秀 山本政幸 浅尾知子「地域における『学校美術館』の構想と準備—地域の学校やアーティストとの連携—」岐阜大学教育学部 教師教育研究 9、2013、pp. 45-54
- 13) 佐藤哲夫 磯辺征尊「芸術家と教員のコラボレーション授業によって生まれる子どもの芸術的気づき『水と土の芸術祭2012』こどもプロジェクトの事例—」新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 7(1)、2014、pp. 159-169
- 14) 辻泰秀 他、同上、2013
- 15) 切り絵アーティスト。1975年 静岡県出身。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。大学の卒業制作として制作した「個人的識別シリーズ」がJACA 日本ビジュアルアート展特別賞を受賞（1999年）。主な仕事に、Reebok とのコラボレーションスニーカー、アーティスト中島美嘉のジャケット・ステージ装飾、手塚治虫×福井利佐 byUNIQLOでのTシャツデザイン、桐野夏生氏の小説への挿画、「婦人画報」（アシェット婦人画報社）表紙へ切り絵での参加などがある。  
福井利佐公式HP より引用  
<http://risafukui.jp/#/contents/biography>  
(平成26年12月26日アクセス)
- 16) 交通費及び謝礼については、学校の経費から捻出した。
- 17) TV 番組や映像作品のDVD は、福井氏のマネージャーより借用した。
- 18) フジテレビ毎週木曜23時0A。2012. 11. 29 放送。
- 19) 福井利佐ブログ  
[http://blog.goo.ne.jp/risafukui\\_cutout/m/201403](http://blog.goo.ne.jp/risafukui_cutout/m/201403)  
(平成26年12月26日アクセス) より引用。

#### 参考文献

- ・城間祥子 茂呂雄二「中学校における専門家とのコラボレーションによる和楽器授業の展開過程—『参

加としての学習』の観点から一」教育心理学研究  
55, 2007, pp.120-134

- ・岡田和也 榎原淳幹「詩の創作授業とワークショップ～言語芸術、書くこと、そして『峠には人の思いが懸かる』～」岡山大学大学院教育学研究科研究集録 第157号, 2014, pp.1-19